

# 平成29年生駒市教育委員会第1回臨時会会議録

1 日 時 平成29年2月13日(月) 午前9時31分～午前11時2分

2 場 所 生駒市役所 403・404会議室

3 審査事項

(1) 議案第2号 平成29年度生駒市学校教育の目標について

4 出席委員

教育長 中 田 好 昭

委員(教育長職務代理者)	山 本 吉 延	委員	飯 島 敏 文
委員	上 田 信 行	委員	寺 田 詩 子
委員	神 澤 創	委員	浦 林 直 子
委員	坪 井 美 佐	委員	レイノルズあい

5 事務局職員出席者

教育振興部長	峯 島 妙	教育振興部次長	真 銅 宏
教育総務課長	辻 中 伸 弘	教育指導課長	吉 川 祐 一
こども課長	前 川 好 啓	こども課指導主事	上 田 直 美
教育総務課課長補佐	藤 本 清 夫	教育指導課課長補佐	城 野 聖 一
教育総務課(書記)	牧 井 望	教育総務課(書記)	松 井 恵

6 傍聴者 3名

○開会宣告

○日程第1 会期及び会議時間の決定

○日程第2 議案第2号 平成29年度生駒市学校教育の目標について

- ・平成29年度生駒市学校教育の目標について、吉川教育指導課長から説明  
＜参照：議案書p1、別冊1、資料1＞

(質疑)

(1) 平成28年度生駒市の子ども達の現状と教育の取組について

神澤委員：児童生徒質問紙調査で「勉強が好き」と回答した児童生徒の割合に対する分析について、詳しく説明してほしい。

吉川課長：資料1、2ページの中段に記載している。これについては学力学習状況調査の結果報告の時にもご説明し、委員の皆様からも、学力は身につけていても勉強が好きという割合が低いことは大きな課題であるとのこと意見をいただいた。

上田委員：このような結果になっている理由を示すデータ等はないのか。

吉川課長：データはないが、調査結果の分析は各校で行っている。学校も事務局も、勉強が好きか嫌いかという点には授業の面白さが大きく関わっていると考えており、子どもたちが興味関心を示せるような授業づくりを進めたい。

上田委員：例えば先生の関わり方やグループワーク不足など、具体的な課題を分析した上で授業を改善する必要がある。子どもたちがより楽しんで授業に取り組めるように工夫すれば、授業を好きになることにつながる。まずは分析が重要である。

吉川課長：2月21日に全小中学校の教務主任が参加する教育課程協議会を行い、各校での授業の取組などについて意見を交換する。来年度の授業改善へつなげられる成果を得られれば良いと思う。

飯島委員：勉強が好きか嫌いかということは、小中学生の年齢段階では、先生や学習スタイルに大きく影響されるため、先生方の努力・工夫次第で勉強が嫌いな子どもを減らすことができると思う。また、別の項目で、「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思う」という回答について、中学校1年に比べ中学校3年の方が割合が低い。授業の好き嫌いといじめに対する規範意識は混在して考えてはいけないが、学校生活は包括的な経験であるので、先生や校風の好き嫌いの問題と規範意識は切り離すこともできない。先生方が子ども達の規範意識が低くなっていると感じているのであれば、原因がどこにあるかという検討が必要である。もしかすると、成長期の子ども達のことであるので、いじめの捉え方が変

化したことにより、数値が低くなったが実態は悪くないということならそれで良い。中学生という多感な時期に先生方がどのような指導を行えるかを検討する機会であるので、調査結果に対して各校で取組をお願いしたい。

寺田委員：15ページ、体力・運動能力調査の結果について、小学校では全国平均を下回る種目が多い。各校の体力向上のための取組が記載されているが、それぞれに成果が上がっているかどうかを検証しているか。取組がマンネリ化して、検証できていないということはないか。勉強と体力は今後の生活にずっと関わってくるものであるので、どのようなところに成果が上がっているか、違う取組の方向があるかなどの検討が必要ではないかと感じた。

上田委員：勉強が好きか嫌いかという問題について、「嫌い」と捉えるのではなく、「まだ好きになっていないだけ」と捉えると、前向きな評価につながり、対応策が出てくるのではないか。

神澤委員：勉強が好きかどうかと学校が好きかどうかは少し違うところがあると思う。学校が好きかどうかの調査はしていないのか。

吉川課長：行っていない。

神澤委員：子どもが不登校になるきっかけの何割かが先生との関係である。子どもたちが何を好きかを知ることは重要である。勉強だけでなく、学校が好きか、友達が好きかなどという調査もできれば良い。

レイノルズ委員：いじめのアンケート調査の時に、学校に行くのが楽しいかというような項目はなかったか。

吉川課長：いじめの調査ではないが、何らかの調査で実施していたと思う。

レイノルズ委員：この取組は保護者にどの程度共有されているか。

吉川課長：この内容は公表していないが、学校評価を含めて学校ごとの総括は保護者や地域に配信している。

レイノルズ委員：教育は学校現場だけではなく家庭に責任がある範囲もあるため、部分的にでも公表できれば良い。例えば読書が好きかどうかという項目に関しては、読み聞かせなど家庭でもできる取組がある。学校でも家庭でも課題を認識すれば、双方の取組によって子どもの学びを伸ばすことができるのではないかと思うので、そのような部分だけでもぜひ情報を共有していただきたい。

吉川課長：学力・学習状況調査の結果については、市のホームページで公表している。

レイノルズ委員：ホームページは活動に熱心な方しか見ないため、保護者会などでも情報を得られる機会があれば良い。

坪井委員：先日、奈良県小学校教科等研究会で音楽の授業を見学したが、先生の指導も子どもたちの笑顔も素晴らしかった。先ほど、21日に教育課程協

議会を開催し横軸の連携も深めるというお話もお聞きしたが、ぜひこのような授業研究の機会にも良い部分を共有してほしい。

中田教育長：この資料は平成28年度の事業の総括である。吉川教育指導課長から話があったように、今後の教育課題を現場で考えるチームを立ち上げる。委員からいただいたご意見も現場で紹介し、課題を共有する。

## (2) 平成29年度生駒市学校教育の目標について

飯島委員：音楽の研究授業を見学した感想も含めて意見を述べる。講演の部分で、その場で楽譜を渡されて歌うという場面があったが、周囲の方々が初見で歌えていたということは、参加者は専科の先生がほとんどであったと思う。音楽の先生が音楽の研究授業に参加して研鑽を積むことも価値があるが、今後は、音楽の授業の進め方や子どもたちの表情を他の教科の先生にも生かしてほしい。子どもたちが楽しく授業を受けるためにできることを考える機会として、実践研究の場を全体で活用してほしい。

レイノルズ委員：前回の学校教育目標と比較したいが、資料はあるか。

〈前回目標をスクリーンに表示〉

レイノルズ委員：目標のイメージ図を見比べると、重点目標の下の支えがよりしっかりとしている。飯島委員のご意見にあったように、授業が楽しいかどうかは教える側の能力による部分が大きいのので、特に教員の支えが二重になっているところが素晴らしいと思う。また、アクションプランでも掲げていた教育環境の整備や情報の共有などを盛り込んでいただいている点も良い。

個人的に、指導スキルに問題のある先生がいると聞くことがあるが、「総合的な人間力の向上」を挙げていただいていることも心強い。「主体的な学びの実現のための授業研究」、「総合的な人間力の向上」、「OJTの機能した職場」を実現するための取組として具体的に何か考えていることはあるか。

吉川課長：課題が多いので取組も様々であるが、授業力の向上が大きな課題である。課題克服のためには、まず校内で研修を行い、事務局からも研修を啓発する。来年度新たに教科研究会を小学校25部会、中学校24部会で行う。他にも、横のつながりでそれぞれの教科の専門性を高めるなど、やるべきことは多々ある。

また、学校独自の取組も必要である。教育を支えるのは教員の力であり、教員がいかに意識を持って取り組むかが重要である。そのための校長のマネジメント能力も必要となる。学校独自の取組にも期待したい。

「総合的な人間力」という言葉は、文科省が「教員に求められる資質能力」のひとつとして使用している。授業研究だけでなく、子どもや保護者に支持されるような総合的な資質を備えるための研修を積んでほしいと考えている。また、熟練した教員のスキルを伝える場も必要であると

同時に、若い先生の新しい知識を反映させる職場環境も必要である。

レイノルズ委員：そのような環境づくりは必要である。熟練教員から若い教員への伝達やその反対も積極的にできる環境づくりを進めたいとのことだが、子どもたちからのヒアリングを行うのも良いかもしれない。分かりやすい授業づくりを子どもと一緒に考えられるような環境づくりも願います。

坪井委員：学校内の研修を強化するとのことである。生駒市で行われている公務員研修に教職員は参加しないのか。

峯島部長：教員は県の職員なので、倫理や接遇などの公務員としての基本的な研修は県教委が担当して実施している。市費の臨時講師に対しては、夏期研修で人権や接遇などの研修の機会を設けている。また、専門研修については教育研究所で計画的に実施されている。なお、幼稚園教諭は市職員であるので生駒市の研修に参加している。

坪井委員：公務員としての接遇や規範の部分を超えて、総合的な人間力の向上のための研修はどうか。例えば生駒市はプロモーション研修を実施しているが、学校でも経済性や生産性などの市場の原理を取り入れた研修を実施してはどうか。

峯島部長：全国の優秀な公務員を招いた講演会は、人材育成として生駒市が力を入れて行っている研修であるが、出席任意の研修である。その研修には学校事務も自発的に参加しており、意欲のある教職員もぜひ参加してほしいと考えている。奈良市でも同様の研修を実施しており、生駒市の教員が参加している例もある。

坪井委員：生駒市の研修はレベルが高い。その研修を学校にも取り入れることにより、子どもたちの教育にも還元できると考える。

中田教育長：坪井委員のご意見のような研修は、職員の自己啓発のために行っているものであり、研修という形で行っているものではない。公務で行う研修には一般研修と専門研修があるが、市場経済などグローバルな問題やプログラミング教育などの新たな取組についての研修は行っていない。関心事がある者が自主的に勉強できるようなきっかけづくりは行っている。

山本委員：昨年度の目標から大幅に改正されており、文言の吟味もこなれていない部分がある。

これはあくまでも学校教育の目標であり、各校が学校経営を考える指針となるものである。しかし、一番下の「頑張る教員や学校を支援する仕組みづくり」という支えの部分は、学校の目標でなく教育委員会の目標であると思う。上の部分と切り離すか色を変えるなど、図の表現に工夫が必要ではないか。

その上に「教員一人一人の指導力の向上」、「安全で信頼される園・学校づくり」の2段が明確になり、それがベースになって重点目標を支える

という図は、構造として分かりやすくなっていると思う。

昨年までは、重点目標4として「創意と活力に満ちた安全で信頼される園・学校づくり」があり、校種ごとの取組の中で学校評価についても具体的に記述されていたが、今回は省略されている。また、教職員の研修についても昨年度は具体的な記述があったが、今年度の目標にはなく、レイノルズ委員や坪井委員のご意見を聞くと、教職員の研修についても具体的な取組を示した方が良いのではないかと思う。この冊子に記述するかどうかは吟味するとして、他の機会に示しても良い。例えば、「総合的な人間力の向上」に対して何に取り組むかというイメージが湧きにくい。せめて、教員としての総合的な人間力にはどのような要素があるかくらいは、最終頁に記載できれば良い。先ほど、坪井委員から、子どもや保護者の評価ももう少し大事にしてほしいとのご意見があったが、私も学校関係者評価をより重視すべきであると考え。学校評価は学校の自己評価であると認識はしているが、学校が楽しいか、授業が面白いかという子どもの意見を聞き自己評価に反映される仕組みが学校評価に求められている。そのような教育委員の意見をこの目標に反映し、学校に伝えることが必要であると思うがいかがか。

この目標は、本日採決されなければならないのか。

吉川 課長：3月の校長会で学校に目標を示したいと考えており、次回定例会には学校教育目標を決定したい。

中田教育長：学校教育の目標の見直しをするに当たり、教員や学校を支援する仕組みの具体的な取組を外したのは、山本委員のご意見のように、この点は教育委員会の取組となるからである。学校教育目標の中に入れるとなれば、頭出し程度で、最後の空白部分に入れ込む方向で調整を行うということが良いか。

山本 委員：昨年の目標では、学校づくりや教員の研修について1ページを割いて記述されている。すべてを複製する必要はないが、全体図にある3つの観点が分かるようにしてもらいたい。

中田教育長：教員や学校を支援する仕組みづくりは現場の目標ではないため整理が難しいが、教育委員会の思いが伝わるように参考のような形で盛り込む。

峯島 部長：次回までの進め方を確認したい。27日開催の定例会までに修正案を示して会議当日に意見をいただくか、それとも、示した修正案に対して事前に委員から意見をいただき、それを取りまとめて会議に出すか。

中田教育長：修正案は事前にお示しするが、意見は会議当日にいただきたい。

山本 委員：昨年明確にされていたように、目標の中に委員の課題意識や思いを反映する形が望ましい。また、新しい文言が出てきているが、単語だけでは意味が読み取れないため、説明を加える必要があると思う。

浦林 委員：先ほど、子どもや保護者からのフィードバックが必要とのご意見があっ

たが、小学校では、学期ごとに教職員からと子どもから、そして保護者から子どもの反応を聞き取るためのアンケートなどを既にも実施して結果を保護者にも知らせていると思うので、補足として申し添える。

山本委員：3つの重点目標に対するそれぞれ3つの具体的な内容について、文末表現が気になる。「～に努めます」という項目があるが、これでは努力目標のようになる。重点目標であるので、「～します」としてはどうか。また、重点目標を支える園・学校づくりの中の「学校評価を活用し、改善する園・学校」という項目は、PDC Aサイクルにより発展し続けるという意味で、「改善を続ける園・学校」のような言い回しにしてはどうか。

さらに、教員の指導力向上について、「総合的な人間力の向上」という項目は概念的であるので、教員に求められる人間力の向上とは何かという説明が必要ではないか。また、「O J Tの機能した職場」という項目について、O J Tという言葉は一時期よく使われていたが、アメリカ的な職場研修のイメージがある。O J D (On the Job Development)の方が教員らしいと思う。

飯島委員：山本委員のご意見のように、目標は努めるものではなく、実現するのが目標であるので、「～に努めます」という文言は使うべきではないと思う。

また、「総合的な人間力の育成」や「O J T」という文言は、数年後に見直した時に定義づけが分からなくなると思われるため、この文面の中で正しく意味が理解できるように工夫していただきたい。

上田委員：この学校教育目標を見て、各校が目標をどう捉え、具体的に何をやるかということをお話し合ってもらいたい。その議論が教員の意識改革につながる。さらに子どもも一緒に議論できれば、共通の目標に向かっていく情熱に結びつく。この目標が話し合いの軸になるというメッセージを付けて、学校教育目標を各校に配布することはできないか。

吉川課長：委員の皆様のご意見は、校長会でお伝えする。

中田教育長：学校教育目標は、事務局と学校とのネットワークでも配信する。来年度からは、職員研修にも力を入れるが、学校教育目標に限らず日々の文書の情報共有も徹底し、意識を高めていきたい。

上田委員：これが一つの研修コンテンツになる。自分たちの学校の言葉で目標を書き換えることが、学校を好きな子どもの育成にもつながると思う。

寺田委員：重点目標の一つである「挑戦を続けるたくましい心身の育成」について、「成功体験をとおして自尊感情を育みます」という項目がある。今の子どもには成功体験は普段からあるが、失敗体験は避ける子が多く、社会で挫折したときにつぶれてしまう。2つ目の項目の「チャレンジ精神」にその意図が入っているということであれば良いが、失敗を乗り越える

力が弱いと思うので、意見としてお伝えする。

また、今回の目標には「確かな学力」に関する文言が入っていない。基礎ができていない子は学校が面白くなくなってしまう。分かる喜びは素晴らしいと思うので、これを文言として入れるか、「主体的な学び」という文言にその思いを含めるかして、この点をしっかりと伝えてほしい。

神澤委員：「挑戦を続けるたくましい心身の育成」の「健康でたくましい体の育成に努めます」という項目の「体」を「心身」としてはどうか。寺田委員のご意見のように、今の子どもは心が弱く失敗をおそれる傾向がある。

中田教育長：その上の項目での「精神」という言葉で心の部分を記述しているので、ここは身体を表す意味で「体」としたままで良いと思う。

レイノルズ委員：3月校長会で伝達するとの話だが、4月に異動になる校長や退職する校長の引き継ぎはどうか。

吉川課長：伝達事項は、各校長が責任を持って次の者に引き継ぐ。学校では、年度内に情報を共有する場を持ち、新年度に各校の目標を作る指針にする。

坪井委員：校長会で学校教育目標を示し、校長からのご意見はその場で聞き取るのか。

吉川課長：学校教育目標は教育委員会が作成するものであるなので、校長の意見は聴取しない。

中田教育長：それでは、本日いただいたご意見を基に、次回に向けて事務局で修正案を作成する。

審議結果 【継続審議】

○閉会宣告

午前11時2分 閉会